

|         |                                   |
|---------|-----------------------------------|
| 氏名      | 森田 泰裕 (モリタ ヤスヒロ)                  |
| 本籍      | 東京都                               |
| 学位の種類   | 博士 (老年学)                          |
| 学位の番号   | 博甲第 106 号                         |
| 学位授与の日付 | 2022 年 3 月 18 日                   |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当                  |
| 学位論文題目  | 地域在住高齢者に対する基本チェックリストの新たな活用法に関する研究 |

|        |                      |         |
|--------|----------------------|---------|
| 論文審査委員 | (主査) 桜美林大学教授         | 新野 直 明  |
|        | (副査) 桜美林大学教授         | 鈴木 隆 雄  |
|        | 桜美林大学教授              | 渡 辺 修一郎 |
|        | 東京都健康長寿医療センター研究所研究部長 | 大 淵 修 一 |

## 論文審査報告書

### 論文目次

|  |   |
|--|---|
| 第 1 章 緒言   | 1 |
| I. 背景  | 1 |
| II. 目的, 意義   | 4 |
| III. 研究倫理  | 5 |
| IV. ベースラインの対象  | 5 |
| V. 言葉の定義   | 6 |
| 第 2 章 第一研究： <u>地域在住高齢者の基本チェックリストの各領域と 3 年後の転帰との関連-新規要介護認定と総死亡のリスク要因について-</u> | 7 |

|   |    |
|---|----|
| I. 目的   | 7  |
| II. 対象  | 7  |
| III. 方法   | 7  |
| IV. 結果  | 8  |
| IV. 考察  | 10 |
| 第3章 第二研究： <u>地域在住高齢者における2年間の基本チェックリストの悪化と新規要<br/>介護認定・総死亡との関連</u>   | 13 |
| I. 目的   | 13 |
| II. 対象  | 13 |
| III. 方法   | 13 |
| IV. 結果  | 14 |
| IV. 考察  | 16 |
| 第4章 第三研究： <u>地域在住高齢者における介護予防事業（自主グループ・短期集中予防サ<br/>ービス）への参加の効果検証</u> | 20 |
| I. 目的   | 20 |
| II. 対象  | 20 |
| III. 方法   | 22 |
| IV. 結果  | 22 |
| IV. 考察  | 24 |
| 第5章 総合考察・結論   | 28 |
| 文献  | 33 |
| 図表  | 47 |
| 資料  | 84 |

## 論文要旨

基本チェックリストは、地域において様々な場面で使用されている。新たな活用法として広い転帰の予防や介護予防効果検証に用いることによって、健康寿命の延伸のためさらなる有用性があると考えられる。本研究では介護予防・生活支援サービス事業対象者の選定に用いられている基本チェックリストの新たな活用法として、中長期的な転帰予測、縦断的な変化の転帰予測への活用、介護予防の効果検証について検討することである。

埼玉県 A 市の 65 歳以上全高齢者に対して 2012 年度、2013 年度、2014 年度に基本チェックリストを配布し、基本チェックリストまたは基本チェックリストの変化を用いた中長期的な新規要介護認定・総死亡のリスク要因の検討、基本チェックリストを用いて対象を調整した介護予防効果の検証を行った。

その結果、基本チェックリストの「運動機能低下」、「低栄養」、「認知機能低下」、「うつ」は新規要介護認定の有意なリスク、「運動機能低下」、「閉じこもり」、「認知」は総死亡の有意なリスクとなった。基本チェックリストの一部の領域は中長期的な転帰を予測し、一次予防から三次予防の広い範囲の転帰に対応した評価指標であると考えた。また、基本チェックリストの「運動機能悪化」、「栄養悪化」、「閉じこもり悪化」、「認知機能悪化」、「うつ悪化」は新規要介護認定の有意なリスク、「栄養悪化」、「閉じこもり悪化」は総死亡の有意なリスクとなった。基本チェックリストの悪化の一部は転帰を予測しており、基本チェックリストの変化を注視する必要があると考えられた。介護予防効果の検証においては、基本チェックリストを用いて対象者の背景を調整することによって、短期集中予防サービスの参加により新規要介護認定が有意に発生する結果となった。参加者には、すでに要介護認定に該当されるべき対象者も多く含まれており、予防事業への参加自体が、新規要介護者の抽出や、要介護重度化への予防になっている可能性が示唆された。様々な機能の低下に合わせた複合的な介入プログラムにより、生活機能の改善、生活の質に向けた介入プログラムの検討が必要である。

## 論文審査要旨

基本チェックリストの活用法に関する研究論文である。

基本チェックリストの新たな活用法として、要介護、死亡などの将来予測や介護予防効果検証を検討した本研究は、健康寿命の延伸などに有効な可能性があり、老年学的意義が高く、独創性も認められる。大規模データを適切な統計手法で分析して結果を出している点も評価される。

以上から、本論文は博士論文としての水準を満たしているという判断がなされ、合格と判定された。

## 口頭審査要旨

30分間の発表と30分間の質疑応答が行われた。

大規模データを分析し、基本チェックリストの新たな活用法を積極的に検討した意義のある研究と評価された。また、研究全体の流れに関する説明にやや脆弱な点はあるが、博士論文の研究として十分な水準にあるだろうというコメントがあった。

その他に、フレイル、チェックリスト回答、死亡の3者の関係について、チェックリストの領域別の結果と複数の領域を組み合わせた結果のリスク予想度の差異について、中長期という言葉の使い方について、二次試問で指摘のあったチェックリストの因子構造について質問があり、適切な回答がなされた。

研究内容、口頭試問の対応に大きな問題はなく、最終的に審査委員の全員一致で合格の判定がなされた。